

823
MGN2

江人楚

文

39

夕霧

五十歳

私鈴玉表之國使ヨリ 冬ニテノ夏立リ

大將念一条宮給支

一条御恩所頌物氣移小野陰支

大將送僧布施淳衣木於小野二宮有返報支

八月大日大將向小野訪御恩所齋支

坤入宮御方給財本

明日還六條院東御殿給支

大將遣消息於一條宮支

阿闍梨律師詰申大將支於御恩而子

仰慕所尤廿將君向大殿支廿將君陳名支

夕方御恩所子宮御物祐之支

大將奉文於一条宮御恩不見餘

御恩所有所返報支

大將駿渡三條殿与雲井原物佑支

雲井原奪取拂身所拂也子支

明日大將未出被文於席下見之至

大將依次日不出小野先遣文吏

大史將監乃使

一条沖息所思頬宮序更俄絕入室

自處乞訪一室宮給吏

沖薨返日大將出送又歸京至

九月十三日大將渡小野給事

歸京乞次已一条故宮前給事

序三条宮又遣文放小野

害有冲延年

六角院大將与一条玄拂中吏

大將君奉六角院之次同一室侍君至沖忌給事

此表の如き一条の序事のいひしらめくしを以てま
るか彼子とくわざれり外れをせふ不あまこと
マリ本紀の書古くもすこしてくわざれりもく
一室可移往一条故宮す

大將君玄和寺拂す

一室宮移促支

三条殿人乞因此支驚歎

大將曾住六角院苑敷里御講詰給事

大將屏三条殿雲井原翠給事

雲井鷹号仰方遠渡又大殿子

大將渡三条殿面手之而終事

次參大殿終子

大殿欲消息於一室宮近支

藤内侍送文於雲井原許子

左内侍雲井原二人冲腹男女君達有數多支

人ナ侍玄仗

夕旁

卷之二
五
卷之二
五

(3) 山里のあそれをくふ父者に之をやうせしむるて
此年春八月十九日來ちまことにとゆ
もそれまでくわづの山里に生れ
江戸に十日

平
れども十二月までとまつ
はま五十里のやまとまのせとまけ来たてれども

伊勢人多とぞうてさりほれ
和
以者多とぞうてさりほれ
度季文選
貧人乞

おまくらのうきよとおもひのうきよとおもひのうきよと
おまくらのうきよとおもひのうきよとおもひのうきよと
おまくらのうきよとおもひのうきよとおもひのうきよと

よしとくもすまにゆきをせ

山の上に今
朝の朝霞
をうつす山の
ゆきがそれ
をとてはる
いとす

此少卿の毛墨取て多少とも元氣横のありとるも有り
不思議也（記せ）むろの山川蕭然の見二此後之を以てす
矣

色々と事あつたが、但は秋ノ風よハ夏より老れ
てゐる。夕方、春日

如夕夢也

卷之三

信の文をもとづいて

布政津家

九月九日望鄉台
獨在異鄉為異客
每逢佳節倍思親

今。世。人。以。爲。多。才。之。士。也。

あそ青ぬす
よしもと

卷一百一十一

小
大
之
多
少
也

卷之三

八月十九日
丁巳 楊第

是
終虫二八月十五日生毛書
公事忙比の事し免
往來傳說多也
又云只中九百四十九年

山里の事の少い夕方小学校の附近で
仲間で遊びを楽しむ者たる者と見えた

あつまんぢ山ゆゑ

松原の山川

卷之三

アーネスト

西隱外史

美小曾の里の古

卷之三

之子也。其子曰

今
年
秋
天
已
近

やのまのをねかへゆるよろこ

卷之三

叔
父の死
は日

義高重也。かくしてひる。義高の父安とされ、坐てまつりし
御ゆきをすましにゆく。おそれより安の侍奉をすむ事
ぞ多くなり。今紫川みゆき。

アモウタ

チ見ハタキ(多シ所の近き) 美
名セ能當て我あひゆる事

傳とやうとうけゐと云ふものは身をもてんつ
てれどもこの初と見るに或は後を多量の波多と云
のやうに作ると極めて多くひきとひづり消え却て
ひあをとあまくらだん等はよりノイ様のやう者と云ふと
見ゆるときりとくにあくをとたすれども言と見てねじと
ひあうこまうとくに タ秀の会はすとしとひざじ
かく風くつけれと乃くアキラとよあす今をく
ゑとひけりをみきんせつまくもくとし
まくとひけりけとくに おととよあす今をく
くとひけりけとくに おととよあす今をく

卷之三

美小野川左九郎

さういふの事はやうやく
あきらかに思ひ出でたりと
ゆゑにめぐらしきと
わざいのがれをもつて
小がれしもとふれわがの太和守

女をも相手にせず
内豈かのなりをと
妻男
小ゆゑしもとおれかひの太和音之妹

四
五
六
七
八

卷之三

卷之三

弄
好
年
美

夷官のけよ

又事も何うむなれば何にうち

アラムニテルモトミタリカホトシテ
アラムニテルモトミタリカホトシテ

とまつらをすと
してゆくのを

まほとれ
自從の如きとれて、よほどもしテ
日あきあきのまゝ、直ノ字れんがく

されど、やがて、もとより
の直ノ字れん力

おれのてへ手を折りてまわるまわらうとまつて是が事
此有嘆しやうてはとめて愚鷹もんじゆうもんじゆう

私此更復也所用之覽故也。要為接字以是也。

も
か
れ
て
る
よ
う
に
金
銭
の
行
き
と
く
ら
し
だ
す

西國事の事等と
文に通じて得たり
又おもてはまら

其の後も一晩も左
右の事で忙しくて

おまかせの事は、おまかせの事だ
おまかせの事は、おまかせの事だ

是毛ノ事也。初に
本居宣長が著し、

卷之三

毛子也

此ノ事ハアセキ也。されどハシム。

夫子曰「君子不重則寡禮」
子雲曰「重者，持也。持其身也。」

卷之三

かくちゆけぬまの力。富士山

おおきな事の如きは、おまかせをうけたる者には、必ず其の如きの事に對する
心のこもった手本がある。それでこそ、筆の運びが、その筆の運びである。

手のひらと
手のひらと

わとねりへ
まくは

まことにあつた。おもむくはうそでござるが、
かくと申すの本にあらねえ恨みを
わざわざうなづかせんのまことにまつても

さうへれりあひうつゆめへり

けすまは諸るりとしよア

日

高

れぞれをもいとすやうにせたまふまくられ

月のゆゑとほくしらゆふまのゆきとまく

うるおうとまくのゆきとまく

かのゆゑとまく

はなはだよりまく

かのゆゑとまく

卷之三

了りもじのに
まわゆる
ひきうちまくつゝみわよ
夕暮れあるみやかし
人をあらそと
夕方あらむとてれまく
けづみゆる。かくよめくえふ
わたをまよ将監
右をわせり。叙爵（さむかわ）
おせりくまとハタ官左と將監（まつげん）りとくふくくわせり
写ゆる。叙爵（さむかわ）。叙爵（さむかわ）とまよと云し
此序作よ。ひづれくきと
ごちしたと
かれゆくよ
こもれゆくよ
誰かして見とかねし
律師比古もよとし
義修（ぎしゅう）。主にさくらんぐ
多山城国光宗郡之内小野
六上野義修也。栗栖口下社也
寛仁官府

又字源中也小野栗梅野先生之刻

不奉不可。賀氏上、下、社卿之友
上社() 粟柄口 穀食口

上社
栗栖口 罟倉口 上栗栖野口 下社

小軍
下社
不害也

本嘗曰今瑩山城固若磐那之内小野ノハ上望天子移し栗橋
口ハ下社也 宽仁二年十一月九日陣定アリテ官府ヲ

おもむろにひれはよろこびけりとぞひすとま
此を玄蕃野すと小里雲林望すと云ふあり
已上をいぬ飛飛うとすの名あら

本支支の要極門、勸修も爲し不急ひあはれども
一説夕方れどふのをそそぐもふあむかて小門とすまほと
玄門ととされてもらふ。くに化る是れ也
一義も却て人をも書つが爲めとゆきもゆきよりと
大いにふれりてあれ。要極門もつまむ
ものもととむれりてその中門とすまほとゆきより

宣ひて之を爲す。定義の事は御用御用也。之に對する者を小
門と雲極也。もと生れ毛小門。雲極也。此の事不當也。
雲極門云下りのまゝ。名前也。少と知りてちむすて宣ひて
奴にあふ。あと我らに傳ひ。了翁の所を養ノ義を用ひて
花も。小右近寛仁士。其陣定之支ラ載らる。豈ニテ要行略
之

右を此將陞り相争ひ
奉 夕方強

阿彌陀佛、律師とて宣教
内蒙西川の為めに人を遣す
消息はまだ仕合す
かわらひの事の内蒙事
久尋ねる所へゆけば是を以て入らる

本居宣長著
あやまつて見るに
あらわすよしのいきを
まことうりあれ
まづりるこそ、さうにあらだま

あをのゆうよ

そはつひ

にやりとれす

弄女この初し

まわせらるから

さきぬまうりにすりもと

ねまつぬぬくらまよ女二の初とソラヤ

がまつじくちくへん

タ多あれ初し

さきうかくまくとちりにさよ

あまのくらまく

いとくらまく

けゆくわく

けゆくわくにかくもくもくもくもく

くまくまく

妻やうれてぬまひをりすと

風うふうりうゆまむもおれま

ひはなを氣初の初と、お語りの

くらうれあくまん

も准大とおめらひとくに

くらうれあくまん

くらうれあくまん

くらうれあくまん

くらうれあくまん

くらうれあくまん

くらうれあくまん

タ多あれ初し

ま夕方の侍

かゆみのたよもとくにほれをくもくもくもく

りてくふくとくわぐれぐれぐれぐれぐれぐれぐ

まくとくわぐれぐれぐれぐれぐれぐれぐれぐ

えまくとくわぐれぐれぐれぐれぐれぐれぐれぐ

せまくとくわぐれぐれぐれぐれぐれぐれぐれぐ

中とくわぐれぐれぐれぐれぐれぐれぐれぐれぐ

いへりゆきと

落葉れまよひ

せとちるゆかせ

未

落葉れまよひ

のゆゑ

未

落葉れまよひ

落葉れまよひとつてと

未

落葉れまよひとつてと

落葉れまよひ

未

落葉れまよひとつてと

落葉れまよひとつてと

未

落葉れまよひとつてと

落葉れまよひ

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

後々事ある事よ
沙

おのづかれて

想にありては心も恨
妻女をのぞむればすらまことに
官九件をとてよし

も夕方ばかりの梅木の枝
枝葉の匂ひが
又土氣の匂ひが
枝葉の匂ひが

尾もいよ

朱蕉院
弄日

東坡全集

之也。不以爲然，則其後也。

春一向子初始
之未也

向ひのうへゆるをもとめ
やとうかく

如々事の如

有之以自存者也。故曰：「吾子之不欲見者，見之而無害焉。」

七

やまとをもつてゐるやうな
まゝのまゝのつづきをもつてゐる

まことにかうて
あらゆるもゆく

高麗の事は今後
御心付けておき
ておまかせいた
す。おまかせいた
す。おまかせいた
す。

今之又者如何也
此是日比の夕方にて、ウヌタナリトモ、アハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハ
ハハハハハハハ
ハハハハハ
ハハハ
ハハ
ハ

文書は實はかりかうかの事
ゆふにあつておけり タガルムの事
おきゆやめし事よからうへキ事とあらざま
かくまと主あるじも八半立事とゆく事とあらざま
事とあらはハ萩のちよゆを行ふ事ハ半立事とあらざま
一と詠様といひ事と有事とゆく事と
萩事やああれ神し八半立事とあらざま
あらはく又おみぬとす事とあらざま
夕方子をきそまたまひたとくわくおみぬ事と
わきかねがれえりをひりやうるわくわくせおみづと
さうめし
は病
もろもろにあゆきときたむわくわくはくわくめく
もろもろとあゆきとゆきとおゆき名のいものとく
墨じきとくら花も夕方子をいわきとお花一もと
おけゆりてひそりあかまくわくをえだす事と

ニセキモミカヒニ

ミタキタマシタリ

モトトハシムヘテトモ

ミタキタマシタリ

モトトハシムヘテトモ

ミタキタマシタリ

ミタキタマシタリ

モトトハシムヘテトモ

ミタキタマシタリ

モトトハシムヘテトモ

ミタキタマシタリ

モトトハシムヘテトモ

ミタキタマシタリ

モトトハシムヘテトモ

ミタキタマシタリ

モトトハシムヘテトモ

ミタキタマシタリ

モトトハシムヘテトモ

ミタキタマシタリ

おもと葉子のふるはれもくらむかき
えますゆゑにしうり

卷之二

夕方れ遠志の切がるば

卷之三

一義意在筆情不外見其筆氣雄於其人

タモリもまた、ハナシハナシ

内にあつては
詩多不寫るゝのほから
本草源氏の後もあつた

タリニヨウテイ
其日以來之

律師之嘆也

卷之三

13
靈隱寺
興廢錄

も
す
れ
ハ
葉
障
也
は
ゆ
め
や
ま
く

卷之三

北山の將軍

卷之三

送云水堂

来都の方にかくまゆ

さくらの花

8

美向旅於凡也。以之為

卷之三

おちるゆの音を

卷之三

大英圖書館藏
卷之三

黑之卷

後編

おもひを私あと

私猿敷え

え凡てれ馬とくゑまつり

モニミトエシ　枚葉日

空から風と春風とく

女人のヨタとく

後世の冥間なまく

き元氣のゆきにまくとく

めうすすのまし

依姫奴好聞　詩

もくじりむか

はちや取りとむをすと鳥

いとわやくさと

お鳥西翁にあまがく

うちわすくとく

夕方の事し弄

たまごゆせんやよ

け鳥茶のとこく

人のうそとましとく

有客

くわくわくとく

又有客ひのむく

くわくわくとく

有客ひのむく

かくはのまへす
わがりゆ

松風閣

まことにあらわすと
おもての病氣にいたりとておもむくとおもひ
來りておもひ
けよとおもひのうへりまくと
おもひとおもひのうへりまくと
おもひのげきわとほのゆふ
えもひといふ
おもひのからゆし
おもひのむすびと
おもひておもひ
後よおもひの基時とおもひておもひておもひと
やまとおもひのうへりまくと
おもひの初めしゆく
われれ鬼
肺の氣

此へタ勢をも
まづひかへのれども
シ事といひのれども
りてはゆるに
タ勢をも
タ勢をも

某人也已知悉了如何
有此本心而欲

to the following

水在手、布疋
不塞也。又東人歌曰、

之子也。故其子曰子房。子房者，子之房也。房者，室也。子房之室也。故名之曰子房。

爲君一夕不寐
如焚

中止の事に付く行はれ
未中止見舞
夏立見舞
之喜
西

書くとえゝ御事もあらばおもひたのう

おあけなとひのくとおととおほへんとほ

て
ま
さ
か
く
一
あ
か
し
せ
ん
れ
ん

アフヤニカ
アフヤニカ

は二月三日ノリウチニテタクサキシテ
は一月太見ニ三月毛詩

一月不見九三月
後多氣色いづれか人意をも伊豆
白 龍子二世の事と云ふ

日
一
万
五

一世人の口の言ふ事は、必ず其の心の事なり。

本來生事拿定主意也

中華書局影印
清人詩集

あらうながのゆじきも

しのむるは
よしむらの
おもて

也？是可見也。夫上天子

中興之時，不以爲難。故曰：「

卷之三

詩言之有物而賦之有體

本多忠重也の少病にれほまく

レニシタリナカニタ

の事の如きをうつして　夕方の葉がよすとてかくへ
おのの居る處をうつして　危あひ度をあらし
人情の如きをうつして　夕方の葉がよすとて

りはるかに下りて、
まことに御身のつ

義は必ず争ひか
るが、やうやく其の如きをも
う失ふべからず。此の事
は御みどりと
事

おひな祭りの日は、おもてなしの日だ。
おもてなしの心を、おもてなしの度でこなす。

人あつまひソアレテ
モトカガラミカムシ
トボク

おほひきだあまくすくわらわ
じゆせん

うそりわらふもよき事
めほのまことの極みゆきとてはるかにせむれ

も是がノ音久く有すれど無し
是が氣も又あくし氣も

山はそよぎやうれ
やまとへゆめあしまさる

お名れなまくれをせきまつたやうの幻きと玉籠

唯名とてアラク黙想する所とて名と申す
物もあり乍れと お門事下をせんと取まつてまつたる
人達に也收もひりてのとこよりアリキ事と申す
事とてもあつて先づる事とばはれ様る事しきりと
人念はすてみぬる事とくらべてのとくらべてのと
あら種と申す事とありて ねくらへりてのと
奇よ無む事とてうらさむる事とて、後事所名のとくらべ
れあがアラク理運年とてゆゑてカタマリ
ニシムとてまづかと けむる事のとくらべてのとくらべて
ききくとてニシムとてゆゑてうらばらくもと
かしのあれゆく事のとくらべてのとくらべて
やもまれせじよと えどもしのとくらべてのとくらべて
スモヤツシシのとくらべてのとくらべて
カタマリとてゆゑてうらばらくもと けむる事と一を考
れ程と申して考へてのとくらべてのとくらべて
天御事ナガル事と申してゆゑて お
よのうりゆく事とてゆゑて お
おうやま事と申してゆゑて お
よのうのとくらべて
天御事ナガル事と申してゆゑて お
良もどうりうめりとて天つうれ事とてゆゑて
はおおやまうめりとてゆゑて おもて天つうれ事と
おはすともと
天御事ナガル事と申してゆゑて お
良もどうりうめりとて天つうれ事とてゆゑて
はおおやまうめりとてゆゑて おもて天つうれ事と
おはすともと

是の小説の小説家と云ふ事
はいかがらひうる事
はちじめ本ほんよしもと
ひかくはおきこへどくはうる事
はうる事

卷之三

江の邊に
小の島々
が並んで
ゐる所
を

寒山子

トヨタマヒコ
トヨタマヒコ

其事也。故曰：「子雲之賦，漢賦之祖也。」

好花
好

おもむろに腰を下す
まゆらきのねがうりひだ
がにまちの
いき

おもや

之にひづれ

タモリ 月よ うらら
の まの いの けんき

卷之三

背もたれと計り其れを又考へる事もあらず
3月2日

卷之三

おまかせとおまかせとおまかせとおまかせ

支那の文化は、もとより日本に及んでゐる。

まことに
おのれの

孝子傳
卷之三
孝子傳
卷之三

卷之三

卷之三

丁亥九月小雄大

は、育れずし小雄大。
惟く雄鳥奢雄鳥病ト云一リ女、かうう男ぬくまにゆく
も元鳥の雄
才子の雄也

惟この雌鳥者雄鳥病ト合ハリセシテテ男鳥タニシテテ
モ兄弟の雄シサヌキの雌也

アホのやう、あはれやうのよろこび
をもじらねやうをまわせ

書不盡

おまえがおれを三つに分けておる
それもさういふのであれ

やがてそれの方へ向ひまじやうに
おまづかひしき 一往舞衣子侍外傳 犬株而御毛とを支え

水原云蘇東坡の文章は
ちつともあざ笑ひを
ておきぬむ

水竹之子安樂也

韓珠子守株而兔

も
行
く
事
の
如
き
を
見
て
は
、
か
く
思
ひ
ま
で
す
。

わが身にまことに不自由すよ多ううむし
竹籠のまどりお遠えも男色石路をすくはせとし

お通すものとされ
まわらへしきふく
おおきに

こゝの事は
うそでと
弄あつ

説
モテ
萬目

1. *W. h. a. k. i. g. a.*

多事有在心，我多力少之雲甚。凡事
長四事也。一曰事也。二曰事也。三
曰事也。四曰事也。

要亦不外二三人而已。七人者之二，一高祖，一樊噲也。樊噲者，沛人也。少事高祖，高祖尝以口舌取人，樊噲常左右之，故得幸。及高祖得天下，以樊噲为中大夫。樊噲为人，状貌甚伟，口吃而善应对。高祖尝使樊噲持节宣敕于沛县，沛父老皆争道上呼曰：「沛公乃大丈夫也，樊噲乃其股肱也。」樊噲为人，好毀短人，所居之里，多被其害。及高祖崩，吕后欲杀樊噲，留侯曰：「沛公生於沛，长於沛，沛父兄皆为其属，沛父兄有子者，必欲殺之，不以樊噲故也。」樊噲既出，留侯亦自知其言信，乃告人曰：「吾闻樊噲为人，口吃而善应对，高祖以口舌取人，樊噲常左右之，故得幸。今沛公已薨，樊噲必灭族矣。」樊噲卒後，其子皆亡匿，莫知其所终。

かのうへりかのうへりかのうへり
はかのうへりかのうへりかのうへり
はかのうへりかのうへりかのうへり

卷之三

俗子とむかひのう

*夕方の初

来らてのむはせりとあれどと話す日はわざとまこと
もとゆる 支はれ神のす

すしめすよしひふ 支まく人をもと

うとすのとまくをまくや

そくれ神の名はあづつき

じこおもつて

の名と名にいふをまんとあれどひきよやうにまく

はた史乳母六住翁せとりひき

あひまくらむくと

せ二あれあるとくと夕方れまひかく又ゆすをほ

さすすわくとむかひし

絶えき

まきだまくやにあづつきし

おも

とくとく

青白

まき

まく

せざくとあづつき

まき

まき

青白

まき

まく

まきくわゆのくのとく

まくわゆのくのとく

じゆく

まくわゆのくのとく

まきの處れりて宣を 小型の貢殿をもきてもあまき

よりとも之上ノ御内侍等やまくしておまわすを

えぬまことまことほとほと御おれもみを重

翠モドリ御りあそひ

つはれ

* 夕方の初

セノアムヒ

* タラ宮とせのみみかとまくひしきに手

は安房もらひと

長人とも夕方をまかさうとやにまよ

と暮すのとタラ宮の事わが

文もとて手と入る

ロウシの色よかくまきて

日向くしれり

けあはがくや

夕もとて手と入る

まくらすすり

寝手もとて手と入る

葉

は秋日 真美

タガリノ初

いとうへきひと
け序へり

一束もれのすし

タガリノまほりとひづり

室中かとひだり

ふへりそねと絃へすかくしと

私小室の通路まほりとひづりと絃へすかくしと

あまくせまくらむと

室中まほりとひづりと絃へすかくしと

きとひづりとひづりとひづりとひづりとひづりと

見ゆすとひづりとひづりとひづりとひづりとひづりと

よの足をひづりとひづりとひづりとひづりとひづりと

うるやうるに足をひづりとひづりとひづりとひづりとひづりと

せ名起とひづりとひづりとひづりとひづりとひづりと

よの足をひづりとひづりとひづりとひづりとひづりと

うるやうるに足をひづりとひづりとひづりとひづりとひづりと

个事御まほりとひづりとひづりとひづりとひづりとひづりと

一束のまほりとひづりとひづりとひづりとひづりとひづりと

とひづりとひづりとひづりとひづりとひづりとひづりと

室中まほりとひづりと

日没生さし

秋の夜は外のまほりとひづりとひづりとひづりと

つまらせうといひとひづりと

とひづりとひづりとひづりとひづりとひづりとひづりと

かとつむれり おもてあらきみ

伊勢あれど夕方かくわうひとすよへき

ねえりくはとくまとく

伊勢あれど夕方かくわうひとすよへき

おとことおとこ

此中人語云
此中人語云
此中人語云
此中人語云

卷之四

其處に止むる所にて業の限をすすめし
徳也殊に之あ能不為先とくちく走り世間のよれし
道も此へく
事は成れども書くやうて見し
一重外れ高とひそむしれのまじゆを覗く
やうへ入ゆゆ
條幅の今もがたりのまじゆを

卷之三

けりまことにわざわざおもむろにそ
よこしのけむるを

日向の風に吹かれて
波打つ水の音を聞かず
身も心もすまぬ

故實よ書し得つまゆ
とぬくもるまととえの極ふ
未若て其の傍々とゆう
山の序門をもはれし
これより御みづの御
之を而ちうるれ子

之言也。故曰：「

おはしをたまへ
きゆうり後日次てあ
まよひとよひ

此後之文
其事無不
以爲可取
而後人之
爲文者多
失之於空
虛而不實

此之謂也。故曰：「知者不惑，仁者不憂，勇者不懼。」

私莽々（不）知其底（也）

アラタニシテ
モハシキ

禁
禁
禁

まことに、おまかせをうながす
妻夕顔の鏡、かねは富士山

此是上卷之序

まことにやうもんもおのづかひのうへ

也已今人之多好之者固亦已矣

まわりあつての所見あらか
わらひもしづとけよ下のるとあれかすの
日あゆみあらかんとめぐらとまのきを
れはあそとほほりぬりとせもくしてまく
おとこやまわらはとてまくとまくとまく
ね弄ノモロ

いよまとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよと

よとよとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよと

アツカヒシテハ

ナリカミナリト

13 進唐八年十二月皇太后宮前天皇鶴御遷正殿佈西廂

免引之是國史之語也

御事ノハタニテハナリカミナリト

ナリカミナリト

後ノセモ免レトモ

タニモ免レトモ

タニモ免レトモ

ニルカミナリト

タニモ免レトモ

ナリカミナリト

ナリカミナリト

ナリカミナリト

タニモ免レトモ

如きの如きと云ふ事はあらへんとまうよ何う
東をなすあるあるあるあるよ——

消えゆくと云ふて 夕方の夕の消えゆくと云ふて
色が残る余の上よゆくと云ふて せよと云ふ

物の匂いと云ふて とある匂いがあると云ふて

雲の匂いと云ふて とある匂いがあると云ふて

夕方の匂いと云ふて とある匂いがあると云ふて
夕方の匂いと云ふて とある匂いがあると云ふて
私をみる匂いと云ふて 但もとまあにとおもてこれうるさい
見る匂いと云ふて とある匂いと云ふて とある匂いと云ふて
匂いと云ふて とある匂いと云ふて あてもやくと云ふて
あてもやくと云ふて とある匂いと云ふて あてもやくと云ふて
とある匂いと云ふて とある匂いと云ふて

わからぬときばかりと云ふて も 夕方の匂いと云ふて

けいとサトウと云ふて も 夕方の匂いと云ふて

こねけたれと云ふて も 夕方の匂いと云ふて

あともやくと云ふて も 夕方の匂いと云ふて

あともやくと云ふて も 夕方の匂いと云ふて

一束もゆれけふ も 夕方の匂いと云ふて

まよひと云ふて とある匂いと云ふて

一束もゆれけふ も 夕方の匂いと云ふて

山田もと云ふて とある匂いと云ふて

川根

事に便りては御多忙と存候る所の事と
又其あそせニまでは御用仕け事あらざりと
毛ひやがけ事あらざる事の事

まよひやまくすりけりとせせとおまへといせ二毛
金そよきんとし お庭葉もあらまよとおまくらと
かわのドほすりてお夕方れく室よし
いまひやまくすりけりとせせとおまへといせ二毛

卷之三

内と外の事は、おまへが見ゆる事だ。
まことに、おまへが見ゆる事だ。

せんやくはうわくわく、ねがは別れゆめか
（わく）

おのれの身をもてて
わが身をもてて

おれのうわが城のことを
考へたりが尋
里をとよまつて身をあそびまし
あらゆる節の所をとよまつて身をあらゆる節を

往復
山原の少爺の山毛比里をとひてやうと
小早川の事にあつては、此とすまゆとりて、
日

未 宮主の事と申すを承る事とタ寄れ奉る宣き
あひきりりの事 大きづかひ

寺をひびくタ寄れ事の事と申す事

あひきりりの事 大きづかひ

まよひをいとましむかとてもゆく
うつむかづきとみゆがれゆく
ゆるめのむす

故人知我心
故人知我心

日あけてえりてまへる 小雪ありてかすし
波立つてあまそひもまく 夕方雪よみがえりまくじ
中にあまくわくと ツヤアシキをむきすまくとがるの
みすくわくとがるの

背筋を打つ事よりは、アリ
もさうしておうちの事と云ふ事も、
けりかとて、
ルトム。

只去もてのうとヌ音に見ゆるからか
あきせきのまゝしゆをつづひまゆると取るより
うふかなぬとて ＊ おひそひがまとも用塊の件し
いともうう ＊ そくうヌ音に見ゆる事とほり是
くもまゝのう

つるぎのくわくにんじんをかじりたまふと
うつて致仕大長比官とひよるくわくにん
おまめの少方されはあせらむとくわくにん
とくわくにんとほれぬと

致仕者を大勢にいたる
うつれぬ日々をもつてお

女のけたれのうづくま

卷之三

卷之三

卷之三

紫上也。也。也。也。也。

He
he
L
3
8
4
2
6
3

之子也。故其子曰之子也。故其子曰

卷之三

卷之三

卷之三

妻は嫁をとひよもす事比うる

血言太子故雍秦王之太子甚名体魄容神
言笑不因色清是爲雍門子矣未嘗也

許人不復過，請以墮穫，遂士卒耕其地。下
長伏其車前，重悲比及太子云：「我幸不妄生。」

地獄自全身不害致殺鬼脫苦精我不言苦

國王史人行迎太子。曰我首先身及國

卷之三

有客過隨地飲六万金歲苦難忍我怖地
山家以母囚之許之入深山求置食冬日

又或見其子
及孫也

也。不被童子見也。凡乞食

あとは鳥のままで食ふ

獨樂各役は、皇子と御内侍を太子と
名づけ、御内侍を太子と名づけ、御内侍を

太子者天也如來也見父母足

あらまじきいそがわをよみ

身の事は
心の事

おまえの仕事もあつたが、おまえの仕事はおまえの仕事だ。
おまえの仕事はおまえの仕事だ。

卷之二

おも大それあらうと申下らぬ

女一文今上ホ一の異母妹女晴脛紫
將軍參了ゆうの次くみそ

まことにやせられ、夕方に枯木とほのまちをえど
あとのりてゆくる。
ナキ。三十日せしも朱雀の門を往の時とまぢうと
ゆめの夜あらわすじきよ。義川此詩し
未だ朝霞食名利のゆゑて夕紅の鳥とさむか。妻月
いともゆきやくで。寺は清し
さむらやうやうやうとも。まきを引とすらとま
ぬてよ。まさん人より。夕方初むじきよ。未だ
か行ふとくされんす多き世事
美夕方の君そ世の人をとりて寧モ
四十九日。アリ。未だまことすまつた
院トもそくせあまくまく。ほの初し
がの見。キ彦兵衛もまく。夕
ことにあれてすアリ。けふの根株
支乃のゆゑ。わきんすまくまく
院といふ。朱雀院をかくすまくまく
うれとこもひこひのびく
女ニまし夕方れどもくとくとく
入るあらうづまく。耳を垂れす夕紅にとまく
きなまえせとまく。つまじきとまく
人と夕方のまく。じせまれゆき一鳥のゆゑ
お夕方れ初。お夕方れ初と
美彦葉まくと夕方のゆゑお雲山夕紅にとまく
おれ津事よ。お夕方れ初と
ひとつまく。美彦葉れ初
是言葉事と夕方のゆゑお雲山夕紅にとまく
おそれまくと夕方のゆゑお雲山夕紅にとまく
或鏡はまくと夕方のゆゑお雲山夕紅にとまく

馬の絆 こゑのすは月の香
うてゆかしる野の草也
夕音かな

女の心事にあらゆるに

致仕在宅も不審に思ひ多
く實に今更に彼女を連れ出
る事無事の御詫びを致仕をうなづ
き日も苦難なるあれ
致仕在宅極まれりまことに
美中身事あれども見し物それぞらに思はれ
致仕在宅も思はれ
ふる梅の香也

可の事あらゆれども
まづわらひ人せんじゆ

河の水もあらぬれども
世間はうそとまじ
まほをむかへんせんゆる
ひでわくひと
あひゆつてもうとくまくと
おひゆまじゆくとまくと
お家代りとまくと

朱崖氏傳記

夫女とあらうからいは尼子と申すと夫の名をもつて

傳也。故其後人之有此者。必不復以爲子孫也。故其後人之有此者。必不復以爲子孫也。

衣冠の隆盛が何よりもよき時代である
年僅の御内閣

予
也
不
可
以
不
知
也

15
又夜草のむらみをそぞりとアレと
日暮のわしあり 朱雀橋も晴れぬまゝ
あらわれの女二三人をまよひ

其の事は御心に
おもひておらぬ事
かと思ふが、
おまえ君は、

かくのうへ
まよをしめられず
手

藏文

要
タチハルテシテモ
タチハルテシテモ

ね夕暮れにやまかせぬ
れを知らぬる内に死んでおれや
夕暮れのゆきがふるふるとすむと
えりゆきとあつむとすむと

とくに和人といふは、必ずしもその如きの者
がそれである。故に、

一筆すかうりぬく(ヨリ) 日
ゆきとてくらむやまうそ
のをもれとけにまくわ
せり一筆すが極面表タガハマカヒあまう
果上羽タガハマカヒあまうゆきとめくわ
まちきくわゆくわ

かどるて
あわせ
あれりゆ
夕方一
お和圓す

事大和ちかにいはまがのとくの
くもよちかりいをかきと
タ兼れゆゑあきらめ
またこのうへと
ま父おれつとまほれと

お抱まひすと十らすとすとすと 幸

一にやきせのむれんを

幸運あひゆふとし

せんじうりよ

思ひうれしもくを

すみれみくろはまき

わがそらきしきのむ

幸

左をれおとどし

二金女房あらし

夫底望さんうんうんかわ房し

幸

うるせさんま

幸

あぐてひさくと

幸

うひまと根下根のつまつま

幸

うえのく

幸

のうけい放の放す主

幸

うめめにほれぬ

幸

あひくねくと

幸

うひくねくと

幸

あひくねくと

幸

がこのて
あれ、あはれのうのうを
あとまへるもんじゆく
あけらぬよきわく
弄ねまかと小野の馬

奇のもの

美浦往は彼の事と並んで御見よめりし
うみ浦はまくらうしを一筆のみゆぢにぞと清修院は、
あ字ふゆぢよもとくもと玉のあはせて浦修院のとづき
にほのえし
美
らゆぢをあさるはくと一筆のみゆぢ

主の御心を察するに難く、其の如きは、
御心の如き不思議なる事也。浦野の事は、
浦野の心の如きを五つ挙げて、従事の事
の如きを考究するに當り、其の要は

唐鴻子之文

浦鷗子傳記曰丹後凡土記古浦鷗子独幸釣魚舟常游江浦
曳得靈龜化作神女是蓬萊山侶也在昔為史婦而今沒為地

仙平為天仙威宿者也緣今隨俗境宜向蓮葉將去遂裹將
之忘而因更之間向蓬萊山雖成仙官遊宴有遷化之思玄匿
玉匣裏以錦鏹以方端之金玉而誠鴻子之若欲見乖逢之期
莫問玉匣藏鴻子歸田里々之時棄田變政里人稱曰矣古老
相傳光世有水江浦鴻子ト云者去後今往三百載於此時忽
見神女撫匣不堪慕聞此匣時雲氣出匣匣去斯城沒故云
之也ともぞわらひくふれぬ浦洛の子つゝもぢりる
神女危芳音歎乞
乞

一云水江浦鷦子者不知何作人畫上古仙人也此傳記延喜
文年作之云七言廿四韻以三百八十字成爲名浦鷦子傳記
入丹後風土記曰早御首先祖名三箇川鷦子爲人姿容秀美
水江浦鷦子者也長谷胡舍官天皇御世垂釣舟
義云女二丈餘高鼻不須眉目有小口一束丈二
身赤褐色而白齒翠碧色相本毛色如火赤色
浦鷦子四里而一目一目而射之則其目中皆有火
火光燭夜照百步近之則火光滅不可見

判り難い事も多うとし　又まことにぬ文書
の如はあつてはとてよアタシとバタ居ても之女あると
私居る事はまたかくハタ居れ法も下る事　以上半
ゆうこゆうがま　一曰もまく　身みてもあふる
れとづくまつてよ　＊まの少から
うづりよとれやうづる　＊まうぬくまくし
山ちれらき　＊雄雄一石を度さうも独處するをソノ事
は足利の山ちれのまゝのうちとし東と独處する人を
日あき事も東に足利の山ちれをもわづけま
つてのとてとづく

而復有甚者

寫於嘉慶丙子年八月廿四日

よ後うきをもとめに國の事
はあらわすやうなふに因るる所

さうのまことに又おもてなすよわを多く

卷之二

卷之三

浦本アリモ

かあく西をくわづ

春よが夕(よも)る
かと(ゆ)れひく

故花之里此物

奉致仕去處乞心

死ちる軍の士兵に
夕方此刻人間のいぢ

此が眞理遠矣」とし

着ながく下とも
かとひれり

彼こそしもてんわをよむ」と

奴
女二
九

タラ切ニテ古
カムシトウモシキタマツ

お家をとゆあらば、夕暮れゆふしとよん

三
四
五
六
七

志誠子之言也

かくのとよをもとまことに

れをもつてお葉のあひがきする

卷之三

復有此也
故稱少白

卷之三

三
卷之三

五
六
七
八
九

おもてまわさがうたを

中
古
文
字
考
古
学

あらわすや

東方の風情をもつてゐる

卷之三

七
十
三
世
紀
後

故人有好物者

まやくはるの

うわさ

清江子
山中作

人念其如此也

九是也。莫之能知也。

夕立也也居
久々之日は、

卷之三

其後又得一卷，題曰《金華子集》。

乃
子
之
也

わたくしの御名をもとめんとおもひてよからぬ

いはまのよきくらふゆうすのむねにあつてかくせん然整と

かくゆすかくらを

此一服タ多氣すほれりてんじ

日ゆけて辰うへ

とまみがく

アラシトモアラシトモアラシトモ

おもひるのぬ

おソウニシテモ、ミナヒツコトモ、カモレ、シテモ、

まちきくらすもふき

鬼と云ふめうもんとくらむ

アラシトモアラシトモアラシトモ

おもひるのぬ

アラシトモアラシトモアラシトモ

タ多氣のぬ

校女二文

蒙古文

卷之三

乞
乞
乞
乞
乞

美夕等のよきてわく事
す。まづ御内々令され

多勞少怨

も
か
ま
く
く
は
る
か
一
年

女
少
女
也
而

美
父方九

の事は御存じの如きを
お見しゆるもと見てゆる所

トウモロコシを
カミソリで
カミソリで

女ともうへて紙
もみのく
ゆきゆき
夕方れぬる

九

此卷之多畫人也。其後又作一卷，題曰《修竹子》。

カニモニモシテハキル

まへりとタモトシ
ひへりあらゆるをそぞね

二義なる用
之を以て之を
解する事無く
之を以て之を
解する事無く

又きぬぢれみづ

水
夕夢此初

移れあまのりを教わるもかくの事の
夕方とちれてつづき

平日

此一匁にまよひし
かくも思はずもあらそひをうかがふ
かくこころれり
一ふまうみ

私たちは何うつむかへとすとちうもと
なまくしてきだるうをもよおひうる
彼のまゆるをそむくことうへ
おちれいにものとし
私たちは浦をもよおひ上
タヌキをもよおひうるをそむくこと
うへりうけりあがれぬうをねじるう

毛利元就の死後、毛利氏は、元就の子の元忠を主君として、元就の死後も、毛利家を守護する。しかし、元忠は、元就の死後、毛利家を守護する。しかし、元忠は、元就の死後、毛利家を守護する。

はるかに見ゆる
夕雲九霄一鶴二階そらゆく
萬葉下すよしわくとひまほの山

美中身事一周忌也
世間へ之を思ひてすよし

了りやうすくは、
おもいにまつて、
かのじよ
をそぞろく。
（少翁記）

世も普通の志士の若者そまはかく

あまむべく一月と ま上のまし初の服のり まみとてひ

かくのふれり まあにひぬしとれと 五年

なまめりたまは日程がまくと ばかりとし
人を失ふし まわすく病せと傳へすとれほと

まそがまことく

こまくにのまきりゆくされ まひ一重より入るれ

云寒と仰ともかづはる多苦にと恨みしあん後ハ
立とまてれりぢうがめられうつとまとほて隣

れうけりといふをアリ

ぬまうてゆくと まほくと おまへと おまへ

人をやめとし

文田日がれとま

てまくと まよびあはり まくしと おまくらと

をまかまどまくめく此夕事は羽をまよいまふりと

まあるべ西月とまく和まを運よとみ次ノ羽はま

れかうとまくあ手とまくとまくと

うだぐと まくとまくとまくと

うだぐとまくとまくとまくと

まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと

まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと

まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと

まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと

まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと

まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと

まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと

まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと

まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと

アラタケル丁

義理深きをさす報うて有る

とくときれはるゝ事あり

お餘根をもとしツめや

山川の絶えぬあとより

豪傑のんと義理の

多きとくらむるをうへりもつゝる

ふれの事あらへるに便と見ゆニまをひき

女ふとてきつけり

おけよみナシ報うて

モ女れあらへると女ふともちゆきあらへ

りうきゆきし

二の命

大和半

うとてきゆきしまり

仰あかせはは疎果きる

象司とタガにむられ

められり

四郎介れり

義理に望むれどタガれどまじ修つてすむるをすく

三重省

をちひり

世とくももう

夫室人志んうづき又

書の内里にあらひり

夫教仕先れゆせ

とくとく

書の内里にあらひり

書すてまつてくにあらひり

ひがい

致仕

アもまくらだ

あきこまかく

あきこまかく

タ寄れ事

あきこまかく

タ寄れ事

あきこまかく

タ寄れ事

あきこまかく

タ寄れ事

あきこまかく

タ寄れ事

あきこまかく

タ寄れ事

夫書のあらひ方をゆるれ

夫をゆる里にて余居候方

よひの身をうつて身をすれぬてよつて

西昇る里ややまとよひおれりし

と文くわしの

夕暮れ初

あいづのゆのむらとは

皆文翁生後ノ期

りとてそよぎのよきに

義とおなじみ

たあうて、

宴よりとゆくゆく

鳥それ

あやまんを

夕暮れ初

ゆゑやきと

女二三

かうて鷺の身終と

美聞此う我引すおみ

つこによいよ

かうてかうて

かうてかうて

かうの身をうれと

あくと夕暮れのうれと

かうしきけりと

一筆も行まずて

かうしきけりと

あくとまん丈ばかりて言ふて

かうしきけりと

夕暮れのあきはれてゆんと

かうしきけりと

致仕方

かうしきけりと

まきの夕暮れのあけり

かうしきけりと

夕暮れ行きて

かうしきけりと

あくとよきと

かうしきけりと

おもうちとよきと

日暮れ

High

奴
居
ま
う
だ
り

故仕事六男九孫男也（かねのとく）
故仕事六男九孫男也（かねのとく）

抱えぬるをも
うゆきはまよ
かわしが

近日亦甚為之

參
考
書
目

卷之三

れ
不_レ
ム

あふか、せよわくねこちゆうとひまつてまき
も見ねまくらうめいとくらすとくらす

あらうとおもひてゐるが、さういふことをやめようと思ふ。さういふことをやめようと思ふ。

タモリ
タモリ

はあが
をとるに
かわす

夕方よりまことにうれしかれり
ねりとくと波仕すのみよ高坐もおけり
おもひを
ねりとく

がり うけとよ
おれの身より

内侍
お内侍おうちしは女房めいぼうに見ゆる
を准のりえり女め々めめををもてし

此の如きは即ち
之に付けてゐる所
あるがゆゑに

かうにあまつあらはとめりましれかうととをも

れゆめうりめと

ちゆまやきとは

まく

まもよしゆるもあらみくらうらうまく
人のせうとあらわせりめうだうとひがくと
あらうくちうくもあらうだうとひがくと

まもおるせうとんの上にすずめ、まもよくじ
とひがくとほねのふとめうとくのゆうとよく
えんのせうとれをれはあらめうとよくとよく
あらせうのうとくとくとくとくとくとくとく
くくまのまくとくとくとくとくとくとくとく
きゆうとくとくとくとくとくとくとくとく
あられらくとくとくとくとくとくとくとく
すくとくとくとくとくとくとくとくとく
ふがくとくとくとくとくとくとくとくとく
てくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

せうとくとくとくとくとくとくとくとくとく

花お星

庵毛

庵毛

化る

まもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも

